「敬天愛人理想を高くおのれを修めて世のためつくす」。校歌四番には、秋田高校の担う社会的責任と秋高生のあるべき姿が表現されている。このフレーズに、大正十一年の校歌制定以来移りゆく時代の変化の中で、決してぶれることのない本校教育の理念を感じる。

私は、「秋高」に赴任し九年目を迎えるが、この間、一貫してこのフレーズを口ずさんできた。それは、この歌詞が、私に勇気と信念を与えてくれるからである。

「敬天週間」は、平成二十一年度から、前年までの「交通安全・身だしなみ確認週間」を名称変更してスタートした。趣旨は、「交通安全指導と通学路指導、駐輪場指導を実施するとともに、元気で明るいあいさつや身だしなみを整える大切さを啓蒙する」ことである。年間五回〔四月上旬、五月中旬、九月上旬、十一月中旬、二月中旬〕にわたり、登下校時に正門や学校周辺、生徒昇降口で、全教職員による指導を行っている。また期間中は、生徒会も自発的にあいさつの励行や交通安全の啓発活動を展開している。さらに、PTA・秋田東警察署・秋田東地区少年保護育成委員会の協力のもと、合同で声掛け運動を行ってきた。その結果、地域の方々から生徒の表情が明るくさわやかになってきたと好評価を得ている。

生徒指導の取り組み
「敬天愛人週間」

前生徒指導部主任　小園　敦

「敬天週間」への名称変更には、ある特別な願いがある。「週間」を設ける理由は、生徒の意識や行動にメリハリをもたらす効果をねらったものである。その上で、「敬天愛人理想を高く」を心に刻み、行動するための心構えや規範を確認してほしい、小・中学校時代を通して、生徒一人ひとりが培ってきた人間としての「あり方、生き方」の原点を思い出してほしい、このような願いを込めて名称変更を行った。

現代社会は、西郷隆盛の生きた時代や環境とは異なるが、「おのれを修めて世のためつくす」秋高生の心意気は普遍であってほしい。生徒の学ぶ意欲が、「金鉄貫く陽気のごとく」教師にひしひしと伝わってくる学校生活の中で、世のため人のために学び、世の中の役に立つ人間になることを「敬天週間」を機会に意識して欲しい。秋高生諸君は、「敬天愛人」の意味を、常に自身の内面に問いかけながら考え、行動してほしいと切に願っている。

「誰かアイツを止めてくれ」
映像甲子園で優秀賞

映像甲子園2010（第五回高校生映画コンクール）の表彰が、去る十一月二十八日、早稲田大学大隈記念講堂におこなわれた。優秀賞をとったほとんどの高校が映像の専門学科の生徒や、映像制作部などの環境の整った学校だった中で、機材を自前で作成し、アイデアと才能と根気で勝負しようと本校の映画好き有志が集まったシマウマフィルム（通称映画愛好会）が『誰かアイツを止めてくれ』という作品を出品し、大会史上最多となる日本学生映画連盟賞、優秀企画賞、優秀脚本賞、優秀撮影賞、優秀音楽賞、優秀編集賞、優秀監督賞の七部門で受賞した。その快挙に会場で学校名が発表されるたびに会場がどよめいた。

反響は大きく、全国の映画作成を志す専門学校の教員・生徒から作品作成の情報交換を申し込まれたり、秋田魁新報に、監督を務めた池田大輝（三年）が紹介されたり、フォンテ秋田で作品が上映されたりとその活躍はとどまるところを知らない。

審査員の先生からの講評「聞き間違いから騒動が起きる、古典を見習ったかのような丁寧なコメディ。先の展開が見え見えで分かっている感じなのに、それでも笑わせてくれる技に脱帽」

監督を務めた池田は今回の快挙を素直に喜びつつも、もっと上が狙えたはずだとし、すでに練りに練った次回作を作成している。

大勢の協力に感謝

池田大輝

映画愛好会は当初、わずか二名の生徒による個人的な活動でしたが、私が二年生になった年から新たに六名のメンバーが加わりました。さらにこの度多くの賞を頂いた映画『誰かアイツを止めてくれ』には、映画愛好会とは関係の無い方々も大勢撮影に協力して下さいました。一人では何もできない私ですが、このような方々の温かい協力のおかげで素晴らしい結果を残せたことを非常に嬉しく思うとともに、関わってくれた全員に感謝しています。本当にありがとうございました。